



The United World College of the Adriatic(同ホームページより)

👉カレッジの「処世術」に救われる

そんなこだわりが変わったのは、三年前だ。

選択の余地はあまりなかった。でも一番の理由は、それまで出会った人々の多彩な生き方に惹かれ、「ほかの人にも伝えたい」と心のどこかで望んだからだと思う。
記者は駆け出し時代、地方で修行する。私も仙台、横浜、名古屋と転勤し、警察署を回り続けた。その間、国際報道や語学を活かした仕事はほとんどしなかった。「留学経験を将来に活かさない」というのはずれな初心を貫き、「私って格好いい」などと思っていたのだ。若かった、としか言いようがない。

社会部から外報部へ異動になり、マニラ特派員として東南アジアの国々を飛び回ることになった。マレーシア、フィリピン、タイ、台湾、ベトナム。暑い国々を回りながら、自分の無知さ、狭量さ、未熟さに愕然とする毎日だった。

驚いたのは、古い「処世術」が続々とよみがえったことだ。独立紛争中の東ティモールでは危険地域で車が壊れ、久しぶりにヒッチハイクした。強面のインドネシア軍兵士に、たどたどしくも必死で「敵意はないの。私を撃たないで！」と訴えた。小さな南の島で住民に取り囲まれ、取材目的を説明するために「バンブーダンス」を踊ったこともある。

極限の状況下で役立ったのは結局、カレッジで覚えたことばかりだった。あれほど「活かすまい」と思っていたのに。シヨックだったが、同時にほっとしたのも確かだ。一〇代での強烈な経験は、コンプレックスにも特権意識にもつながる。でも、時が経てばごく自然に活かされることもある。それは職業にかかわらず、多くのUWC卒業生にいえることではないだろうか。

今年四月、特派員生活を終えて日本へ戻った。先が見えない生活は相変わらずだが、無理をしなくても過去が現在につながっていくことはわかった。カレッジ卒業から一七年。遅ればせながら、奨学金を出していただいた企業の方々に改めて心から感謝したい。そして、あのUWCでの刺激的な生活を、冒険好きな高校生たちにぜひ、経験してもらいたいものだと思う。

正論

禁書『親日派のための弁明』著者に緊急インタビュー

やっぱり韓国は変わらない

金完燮vs黒田勝弘

市民アナーキズムの脅威 中西輝政

靖国・教科書と田中康夫問題と

誰も話さなかった竹下登の実像

特集 戦後生まれの大東亜戦争

「偉大なるマッカーサー」という神話

元隊長の回想・人間魚雷「回天」の出撃

水野清
松本健一／佐伯裕子／坂本多加雄
／遠藤浩一／佐藤健志
牧野弘道
片岡紀明

●電話で/0120-34-4646
●FAXで/03-3241-4281
産経新聞社へ

9 定価680円 (税込)
月号

お問い合わせは

冒険好きなら若者たちへ

朝日新聞社外報部記者

郷富佐子
こうふさこ

UWCアドリアティック・カレッジ(イタリア、一九八三～八五年)。八八年ロンドン大学卒業。八九年朝日新聞社入社。



胸を張って言えることではないのかもしれないが、私はここ二〇年近く、同じ場所で三年以上暮らしたことがない。

思えば、この落ち着きがない人生は八三年、イタリアのUWCアドリアティック・カレッジから始まった。ユーゴスラビアとの国境に近いトリエステ郊外で、世界中から集まった生徒たちと二年を過ごした。日本でいえば高校二、三年が集まるカレッジは、当時開校して二年目の校舎や寮の工事は大幅に遅れており、最初の一年間はホテルに住んだ。

苦手な英語で真剣に議論

今では完備されている設備の多くはなかったが、生徒たちによる手作り感にはあふれていた。校則はほとんどなく、問題があれば食堂へ教師や生徒が集合し、何時間でも話し合った。「国際理解」や「世界平和」についても、真剣に議

論した。当時はまだ冷戦時代で、東欧からの生徒たちもいた。隣のユーゴスラビアは紛争が始まる前で、連邦国家だった。南アフリカのマンデラ前大統領はまだ獄中におり、南アの白人生徒が授業中に議論を始めたこともあった。

出身国によっては、最初私と同じように英語が苦手な生徒もいた。でも、そういう生徒は代わりに押し出しが強い。こうした集団の中で生きていくには、下手でもどんどん主張するしかない。流ちょうで優等生的な意見より、たどたどしくても個性的な発言が受けたのだ。

先生たちも国際色豊かで、熱血漢が多かった。重力についての授業中に校舎の雨どいをするすと登り、「ほくが落ちるまでの時間を計れ」と叫びながら飛び降りた物理の教師。イタリア語の授業では、「この鉛筆は黄色い」と言っただけでイタリア人教師に「すばらしい!」とほめちぎられ、窒息するほど抱きしめられた。あまりの楽しさに、二年間で結局日本へは一

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名以上の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに三四〇名以上の卒業生を輩出している。

度も帰らなかった。夏休みなどにはバックパックを背負い、親友とヒッチハイクでヨーロッパを旅した。「今晚は一体、どこで寝ることにするのか」とドキドキしながら。日本の同級生たちが受験勉強をしていた時だ。さすがに時々、「こんなに自由を満喫した後で、日本社会に順応できるだろうか」と心配になった。

ただ、「この経験を将来、役立てたい」とは考えなかった。なぜだろう? 「私は後々のことまで計算して、この生活を選んだのではない」と思ったのかもしれない。そういう計算高さは、大人みたいでずるいじゃないかと。結果として、青臭く行き当たりばつたりの生き方を選んだ私の人生はその後、どんどん迷走した。

多彩な生き方に惹かれ、 新聞記者の道へ

大学時代を過ごしたロンドンでは、膨大な量の課題書に辟易しながらも、毎日バブに入り浸ってカレッジ時代と同じような議論を続けた。卒業後は同級生の多くが金融業界へ進むなか、何のあてもないまま日本へ戻り、なぜか新聞記者になった。就職活動で訪問する先輩がおらず、